

子どもの不安やリスク回避時における類型的展開に関する考察  
— 「物語」からの視点—

渡辺 賢治 ・ 渡邊 洋子 ・ 大友 由梨香

常磐短期大学研究紀要 第53号 (2024年度) 別刷

令和7 (2025) 年3月

# 子どもの不安やリスク回避時における類型的展開に関する考察 —「物語」からの視点—

A Study of Typological Development during Anxiety and Risk Aversion in Children:  
A Perspective from “Narrative”

渡辺 賢治 ・ 渡邊 洋子 ・ 大友 由梨香

## 要旨 (Abstract)

本稿では物語を通じた子どもの不安やリスク回避行動の特性とその教育的意義について考察する。例えば、児童文学において、不安や恐怖に直面する主人公が試練を克服する姿は、子どもが現実の危機に対処するヒントを与える重要な題材となり得る。具体的には『赤ずきん』や『ヘンゼルとグレーテル』、『三匹の子ぶた』や『ジャックと豆の木』などを取り上げ、物語の中で描かれる「逃避」「対抗」「依頼」「挑む」といった行動パターンに注目する。そこから子どもの想像力とリスク対処能力の発達や促進について、小学校1・2学年の国語教科書の教材も踏まえつつ考察すると、物語を通して得た疑似体験が情緒的成長や柔軟な行動選択を支える基盤となることが挙げられる。また、物語内容についての対話を通じたコミュニケーション能力の向上や実生活への応用も期待される。総じて、絵本などの物語における想像力を教育的資源として活用する中で、防犯やリスク管理教育への接続・活用としての新たな可能性も認められるのである。

## キーワード (Keywords)

子ども、物語、想像力、リスク回避、類型的行動

## 1. はじめに

子どもの成長過程において、不安や恐怖といったリスクに直面する場面は少なからず存在する。その際、いかにして子ども自身が不安や恐怖を克服し、かつリスクを回避するかは個々の人格形成や社会生活にも大きな影響を与えるものと考えられる。

---

2025年1月31日受付  
WATANABE Kenji 幼児教育保育学科・准教授（日本近代文学）  
WATANABE Yoko 人間科学部・准教授（国語教育学）  
OTOMO Yurika 常磐大学・常磐短期大学職員（被害者学）

回避方法は様々あるが、一例として、絵本などの児童文学における「子ども向けの物語」の有効性が挙げられる。何故なら、不安や恐怖を感じる状況に置かれた主人公が試練を乗り越え、命を救われる場面が数多く描かれており、それを追体験として吸収していくことで、自己防衛や回避行動を学ぶ上でも重要なヒントとなるからである。実際、レファレンス協同データベースでは、子どもの防犯意識を高めるための術としておすすめ絵本はないかといった問い合わせが複数確認できる<sup>1</sup>。その一方で、学術領域において、こうした視点に焦点を当てた研究はほとんど見当たらないのが現状である。

そこで本稿では、実験的試みとして児童文学すなわち絵本における「物語」からの視点を拠る所に、子どもが不安や恐怖などのリスク回避を行う際の行動や心理について考察し、その教育的意義について論及してみたい。なお、本稿で使用する「子ども」という言葉は幼稚園・保育園等の園児と小学生（主に低学年）を含めた意である。

## 2. 物語における不安とリスク回避の表現

### 2.1 不安や恐怖などのリスクが描かれた物語

児童文学には登場人物の不安や恐怖といった場面が数多く描かれている。例えば、『赤ずきん』や『ヘンゼルとグレーテル』では、見知らぬ場所に迷い込み、未知の存在に対する不安や恐怖、危険などが描かれている。また、これらの物語では、登場人物が危機を乗り越えるための行動をとり、最終的には上手く回避する。こうした物語展開は読者である子どもにとって自分が同じ状況に陥った場合、どのように対処すべきかを考える指針にもなり得るだろう。

『赤ずきん』では、主人公・赤ずきんの無邪気さと狼の狡猾さが対照的に描かれている。赤ずきんの素直さは、読者に共感を与える一方で、危険への無防備さが物語の不安要素を強調している。一方、狼の言動には、表面的な優しさと内なる悪意という二面性が認められ、物語全体における不穏な雰囲気醸し出している。

物語における不安や違和感の具体的描写として、「きょうは、なんだかきみがわるいわ。いつもなら、おばあさんのおうちへくれば、とつてもたのしいのに。」「ああら、おばあさん、おばあさんのお目は大きいのねえ。」「おばあさんのお耳は大きいのねえ。」「おばあさんのお口はこわいほど大きいのねえ。」「でも、おばあさん、おばあさんのお口はこわいほど大きいのねえ。」といった表現が挙げられる。森を通る場面や狼との遭遇、おばあさん宅での狼との対峙が中心的場面となる。

『赤ずきん』を通して、子どもは知らない人や危険な状況に対する警戒心を学ぶとともにルールを守ることの重要性（赤ずきんは母親から森で寄り道をしないこと、狼に気をつけることを守らなかったために危険な目にあったこと）も認識し、現実における不安やリスク回避にも重なることが挙げられる。

同様に『ヘンゼルとグレーテル』においても、物語における不安の具体的描写として、「どう

したら、あたしたち、森からでられる？」「泣くんじゃないよ、グレーテル。いいから、ぐっすりおやすみ。神さまは、きっとぼくたちをたすけてくださるよ。」「道はきっと見つかるよ。」「ああ、神さま、どうかあたしたちをおたすけください。」「こんなことなら、いっそのこと、森のなかだけでもに食べられるほうがよかったわ。だって、そんなら、おにいさんといっしょに死ねたんですもの。」「ぼくたち、はやく魔法使いの森からでるんだ。」「これじゃ、むこうへいけやしない。」「でも、あそこに、白いカモが一羽およいでいるわ。たのんだら、きっとわたしてくれるわよ。」といった表現が挙げられる。いずれもヘンゼルとグレーテルが直面する極限の状況が反映されている。道に迷い、命の危険からどうにか回避する姿は、現実への教訓としても大いに機能するものと考えられる。また、不安や恐怖を表現するこれらの言葉は、物語全体の緊張感を高めるとともに読者が主人公たちに共感し、物語に引き込まれる要因にもなる。

これら両作品の物語展開を通して、子ども自身が虚構（フィクション）における想像行為の中で、現実での危機を乗り越える術を学ぶきっかけとしても捉えられるのである。

## 2.2 キャラクターの行動パターン

物語の中で、キャラクターが不安やリスクに直面する際の行動パターンには、いくつかの類型が認められる。例えば、「友人や家族の助けを借りる」「自身の持つ知恵や能力を駆使する」「内的な勇気を引き出す」といった行動パターンなどが挙げられる。『赤ずきん』と『ヘンゼルとグレーテル』においても、同様にそれぞれキャラクターの行動パターンがいくつか挙げられる。両者の特徴をまとめると以下ようになる。

### ○不安や違和感を直感的に感じ取る

赤ずきんは狼に対し、また、ヘンゼルとグレーテルは魔女の家に対し、それぞれ違和感や不安を抱く。

### ○状況を確認しようとする行動

赤ずきんは狼に質問を繰り返し、ヘンゼルとグレーテルは道しるべを用意したり、魔女の様子を観察する。

### ○即興的・機転を利かせた対処

赤ずきんは狼の不自然さを確かめようとし、ヘンゼルとグレーテルは石やパンくずで道を記憶するための工夫を行う。

### ○不安を共有または相談する場面がない

両者ともに親や他者に不安を相談する描写はほとんどなく、いわば孤立した状況で対処する。

### ○初動では危険を完全には認識できていない

赤ずきんは狼の親切そうな態度に騙され、ヘンゼルとグレーテルは魔女の親切に疑いを抱

きつつも家に留まる。

○危険度が高まるにつれて状況に適応していく

赤ずきんは狼の異常に気づき始め、ヘンゼルとグレーテルは魔女への反撃を計画するなど、危険に適応し行動を変える。

○無力感を一時的に感じる

両者ともに、狼や魔女の圧倒的な力に直面して恐怖や絶望を感じる場面がある。

○協力的な関係での解決を図る

『赤ずきん』では猟師の助けを得て狼からの危機を脱し、『ヘンゼルとグレーテル』では兄妹が協力して魔女を倒す。

○危険を克服した後に学びを得る

両者ともに物語終盤では経験を通じて成長し、より賢明な行動を示す兆しが認められる。

これらの行動パターンからは、物語におけるキャラクターの成長や読者への教訓の提示を目的としていることがうかがえる。また、現実の子どもが危機的状況に対処する際の心理的反応や行動モデルとしての接続や活用の余地もあるだろう。以下、次の項目「3」では、物語と現実の場面における比較を行い、不安やリスクに対する類型的な行動について、具体的キーワードを挙げながら考察していく。

### 3. 不安やリスクに対する類型的な行動の考察—仮想である物語と現実場面での比較—

#### 3.1 対象からの「逃避」

物語において、キャラクターが危険な対象や場面から「逃避」する例は数多く見られる。例えば、『三匹の子ぶた』では、子ぶたたちが狼から身を守るために逃げるシーンが描かれている。児童向けの物語の中で主人公である子どもや子ぶたに象徴されるような社会的弱者が危険な対象と遭遇する場面は、しばしば保護者である大人が不在の状況下で起こる。

平穏な日常を送っていた主人公が予期せぬ危険な対象に遭遇し、それが生命の危険に及ぶものであれば、たとえ子どもであっても自らの力で何らかの対処をしなければならない。対抗する術がなく、取り得る手段を選べない場合は、まず危険な対象からの「逃避」が最も有効な手段となる。この物語では、「逃避」という行動を取ることにより、まずは身の安全を確保し、そのうえで機転を利かせることによって、直接的に狼と戦うことなく退治することができたことが示されている。

『三匹の子ぶた』は幼児期に保護者や保育者による絵本の読み聞かせなどによって出会う作品であろう。子どもは、幼児期には物語の展開を理解し、予想をもって話を聞いたり、登場人物の心情に共感するなど、物語に対する能動的な関与ができるようになってくる(川端, 2013)。つまり、聞き手(読者)である子どもは「どうしてわらや木のおうちではいけなかったのか」「ど

うしてレンガのおうちであればよいのか」「煙突からの侵入は何を意味するのか」などについて考え、想像を巡らせることであろう。また、絵本の読み聞かせによって、幼児（4～6歳）の危険認知が促進することが確認されており、物語の理解力が高い子ほど絵本の教育効果が顕著であることから、子どもの発達段階に合わせた絵本を選ぶことの重要性が述べられている（池田ら、2019）。

物語に登場する危険な対象を現実社会に置き換えてみると「犯罪企図者」や「犯罪者」としても捉えられる。残念ながら子どもが犯罪の被害者となる事件がある以上、子どもであっても個人レベルで犯罪に対する予備知識を得て、対処方法を学習しておく必要がある。藤井（2010）は、安心、安全が脅かされる現代に生きる子ども達にとって、危険が忍びよっているということを未然に察知し、早めにそういった危険から回避できる能力である「危険回避能力」を防犯教育において身に付けさせることが重要であると述べている。

『三匹の子ぶた』が子どもへの防犯教育に有用であるかどうかは別として、幼児期における絵本の読み聞かせによる疑似的体験から、危険に直面した際に子どもが「安全な場所へ逃避する」ことの重要性を理解しやすくなることも十分想定されよう。

### 3.2 知恵や工夫による「回避」と「対抗」—性差による対処行動の特性の観点から—

物語の中には、登場人物が知恵や工夫を駆使してリスクを乗り越える場面も多く存在する。例えば『ジャックと豆の木』では、ジャックが巨人を知恵で出し抜き、危険を回避するシーンが描かれている。

ジャックは危険な対象である巨人の特性や特徴的な行動をよく観察することで、対処方法を見つけ出し、見事に危険を回避しながら金の品々を得て、巨人の攻撃からも逃れることができた。この「回避」と「対抗」の行動は、危険の対象をよく理解し、取り得る有効な策は何かを考えることが必要となる。

転じて、現実社会における危険な対象への「対抗」は、物語の世界と違って、子どもか大人であるかに関係なく、時に非常にリスクが高い対処行動であると言える。現実においては、犯罪に遭いそうな場面に直面した場合、男子は自己防衛的な手段を取る程度が高いが、女子はそもそも危険な要因からは回避する程度が高い傾向にある。また、男子は比較的安易にできる対策にとどまる一方で、女子は男子よりも犯罪への対処行動を多く取る傾向にある。これは犯罪に遭うかもしれないという不安（「犯罪不安」(Fear of Crime)）の高さとも関連している（大友、2010）。

仮想の物語の世界と現実社会とでは取るべき対応が異なることから、『ジャックと豆の木』では「冷静に状況を見極め、最適な解決策を見つけ出す」という点について学び取ることのモデルとなるだろう。これを正しく理解するには、読者である子どもの解釈に大人による視点を加えることによって、より物語の意味と発展的な理解が深まるものと考えられる。

犯罪不安は、一般的に女子の方が男子よりも高い（藤井（2010）、大友（2010）、日工組社会安

全政策研究財団 (2019))。その理由として、伊藤 (1996) は、脆弱性 (vulnerability) の高さによるものとし、高齢者や女性は、自分が自己防衛や危険回避の行動をとることができなと感じたり、被害のもたらす身体的・心理的なダメージに対処できなと感じたりする結果、不安感が高くなると述べている。それにより男子よりも対策を講じる傾向にあることが指摘される。このような性差による特性を踏まえると、『ジャックと豆の木』ではジャックという男の子による「回避」と「対抗」であり、主人公が女の子であった場合、ジャックとは違う手段で巨人に立ち向かった可能性も挙げられる。

### 3.3 仲間や大人への「依頼」

子ども向けの物語の多くは、主人公が仲間や大人に助けを求める行動も描かれている。例えば『オズの魔法使い』では、ドロシーが仲間と協力して冒険を進めていく場面が象徴的である。仲間にも助けを求めたり、支え合ったりすることで不安やリスクを克服するという展開は、まさに子どもにも「協力の大切さ」を教示するものである。

この物語は、不運な出来事により見知らぬ地へ辿り着いたドロシーが、自分の家へ帰りたい (心配している家族を安心させたい) という願いを叶えるため、偉大な魔法使いであるオズに会いに冒険に出るという内容である。冒険の中で同じく悩みを抱える仲間や親切な魔女と出会い、協力し合いながら様々な困難を乗り越えていく。

冒険部分で危険な対象と遭遇する場面が度々訪れるが、弱者と思われる主人公たちは、互いの弱点を補い励まし合いながら、危険な場面を切り抜け、圧倒的な力を持つ西の魔女に立ち向かっていく。戦いを終えるころには、ドロシーの仲間たちが抱えていた悩みは、魔法の力を借りずともすっかり克服しているという成長過程も描かれている。

この物語の主人公像は、困難な状況に置かれようとも、明るく、素直で、仲間思いで、正義感溢れる、ある意味ではフィクション特有の理想的子ども像として描かれている。ドロシーは信頼できる仲間との邂逅や善良な魔女などの助けにより、困難な状況を乗り越えることができた。これは、児童が困難な状況に直面したとき、友人や大人に相談するという行動を選びやすくするものと考えられる。

では、現実場面で考えてみるとどうであろうか。子どもが恐怖や不安を感じる場面に遭遇したとき、前述したような咄嗟の「逃避」や「回避」という対処方法もあるが、危険が迫っていることを大人や友人に知らせ、他者の適切な介入を求めるという対処法も重要な選択肢となる。江尻 (2010) によれば、子どもは幼児期から児童期にかけて、見知らぬ人物の誘いに乗ることの危険性を認識できるようになり、5～6歳児になるとこれから起こり得る事態や相手の行動について予測しながら、危険回避行動を選択できるようになると述べている。これに関連して藤井 (2010) は、成長とともに行動範囲も広がり、その分、子どもが犯罪に巻き込まれる機会も増えると述べていることから、危険な場面に接したときに咄嗟に駆け込める場所や手段を日ごろから

学習しておく必要があると言える。犯罪に対する対処行動の動機づけとしてある程度の不安が必要であるが、藤井によれば、児童期後半には犯罪不安が低くなる傾向があり、それに伴い、防犯対策への意識も低くなるという。また、このことについて藤井は、学年が上がるにつれて学校生活に慣れ、一人で行動できる範囲が徐々に広がっていくことによるものであるが、不安の低下とともに防犯意識水準も低下することは、犯罪に遭う危険を高めることにつながる点を指摘している。さらに、加納（2014）は、児童期後半になれば、徐々に親との意思疎通が難しくなることから、それまでに段階的に安全性に対する判断能力を高めていくことが重要である点を指摘している。その他、池田ら（2019）も発達段階に適した防犯教育の必要性について述べている。

この物語では、怖い思いをしたとき、困難を抱えているときに他者に協力を求めていること、協力してもらうことで困難を乗り越えられることを教えてくれている。これには他者を肯定的に受け止め、協力を求めやすくする環境づくりが重要であると言える。

### 3.4 勇気を出して「挑む」

時に、物語の主人公は不安を感じながらも勇気を出してリスクに立ち向かう場面も要請される。例えば、『ライオンと魔女』で主人公である4人の兄妹は未知の世界や恐ろしい魔女の存在に恐怖心を抱きつつも、使命感から勇敢に戦いに挑むシーンが描かれている。

物語の主人公たちは、好奇心旺盛で怖いもの知らずの子どもたちである。得体の知れないナルニアという国で出会った仲間とともに残忍な魔女相手に戦いを挑んでいく。

この種のファンタジーは、読者側もそれを物語として受容し、象徴的に語られた真実として理解するものである（川端、2013）。ファンタジーでは、非現実の空想の世界で物語が展開されるため、危険や不安を喚起する場面が多く登場する。主人公は、選ばれし勇者として特異な力を得て、悪に打ち勝つという読者である子どもにとって憧れの設定となっているのもファンタジー作品の魅力であろう。

では、この物語における世界観を現実社会における教訓とする場合、どうであろうか。主人公たちは、物語の中で見知らぬ者と出会い、相手がどのような意図を持っているかをよく理解せず、導かれるがままについていくということが挙げられる。これにより、物語が思いもよらぬ展開へと進んでいく。物語の中では魅力的な展開と言えるが、現実ではその危険性を理解しておかなければならない。江尻（2010）は、子どもが被害者となった略取誘拐事件の実態を取り上げ、被害者である子どもは加害者の甘言に騙され、自らついて行っていることを述べている。また、子どもの安全・防犯教育においては、従来型の学校や警察による防犯教育に加え、子どもの発達に合わせて他者の意図や動機といった心的状態についても考えることを、日常での自然なやりとりの中で促すことの有用性について示唆している。一方で、江尻は家庭や学校の外で遭遇する人々は、実際には危害を加える人々ではないにもかかわらず、子どもの安全・防犯教育が目的とはいえ、幼児期から他者への不信感を植え付けたり、過剰に保護したりすることが子どもの自律

性や創造性を育むことになるか疑問を呈している。

物語の世界に触れることは、発達段階にある子どもにとって感性や創造性を豊かに育む素晴らしい体験であることは言うまでもない。物語の登場人物の心情を読み取り、思考することで、物事や心の機微も理解しやすくなる。さらに、疑似的体験を通して、現実場面ですらや周囲の者を脅かす場面に直面した時、状況に応じた対策が取られる一助になるであろう。また、この「挑む」行動の描写は児童に対して恐怖を感じても果敢に立ち向かう勇気を教え、そこから児童に自己の成長や自己効力感を高める役割も果たしていると言える。物語の中で大いに体感してもらい、現実において「挑む」という気持ちを持ちつつも、現実と物語の世界との違いについても理解していくことが大切である。

#### 4. 物語からの学びと実生活への応用

##### 4.1 疑似体験を通じた感情の理解

物語を通して、子どもが不安や恐怖を感じることは、感情の疑似体験<sup>2</sup>を可能にすると言える。特に、登場人物の心情に共感することで、子どもは自分が同様の感情を抱いた際にどのように行動するかをイメージしやすくなる。感情の疑似体験が子どもの情緒的成長を促し、実際のリスクに直面した際にも冷静に行動する一助となるだろう。なお、防犯教育の観点からだが、こうした内容に関連する実証実験の一例として池田・魚里・板倉 (2019) らが行っている。池田らは、防犯絵本の読み聞かせによって幼児の危険認知が発達するかを検討した結果、4歳—6歳の幼児において、危険認知が促進するという結論を示しており、防犯絵本が幼児の危険認知を促す点で効果的であることを挙げている。また、疑似体験に接続する理論として、ケンダル・ウォルトンの「ごっこ遊び」の理論<sup>3</sup>も関連する要素の一つとして挙げられる。ウォルトンに拠れば、人間自身、フィクションを通してあたかも真実であるかのように「想像」する、虚構の真理体験をしているからこそ、フィクションであるはずのホラー映画に恐怖感を覚えるということを述べている。メディア媒体は異なるが、このことは絵本でも同様のことが想定されよう。その他、ヒーローごっこでは正義のヒーローになりきることで物語世界はもとより、そのキャラクターへの感情移入が顕著となり、同様の言動を行うことも当てはまるだろう。いわば疑似体験はある種の現実における類型行動を促す役割を果たすものと考えられる。

もちろん、虚構と現実との差異により、全ての疑似体験が通底するものではない。それでも想像力の積み重ねによる経験が豊かな感情表現を育むこととなり、結果、現実におけるリスク回避や適切な対処行動への補助的役割を果たすものと考えられる。

現実において、防犯絵本ではなく一般的な絵本において同様の想像力を役立てる具体例として、先の『赤ずきん』や『ヘンゼルとグレーテル』を踏まえると、以下の内容が挙げられる。

(子どもの防犯に物語の想像力を役立てる具体例)

○知らない人への警戒心を育むシミュレーション

『赤ずきん』の狼を例に、「知らない人に声をかけられたらどうするか」を子どもと一緒に考える。

○道に迷わないための工夫を教える

『ヘンゼルとグレーテル』の石やパンくずのように、外出時に目印や合図を確認する習慣を教える。

○直感を大切にすトレーニング

物語の中で「何かおかしい」と感じた場面を参考に、子どもに違和感を持ったときの行動（逃げる、助けを求める）を教える。

○リスクとルールの具体的共有

赤ずきんの母親のように、外出時のルール（寄り道しない、予定外のことをしない）を日常生活に取り入れる。

○危険を察知する力をゲーム形式で養う

『ヘンゼルとグレーテル』のように、隠された危険や脱出のシナリオを用いたロールプレイングゲームを通じて防犯意識を高める。

○助けを求める力を育てる

『赤ずきん』の猟師や『ヘンゼルとグレーテル』の協力的な動物たちを例に、困ったときに信頼できる大人を探す訓練を行う。

○自分の周囲に注意を払う習慣をつける

ヘンゼルとグレーテルがパンくずや石を使ったように、自分のいる場所を覚えることや戻るための工夫を教える。

○物語を通じた感情教育

物語を読みながら「怖かった場面はどこ?」「どうしたら安心できる?」と感情を言葉にする練習を行う。

このような具体的な疑似体験の蓄積が、子ども自身の想像力を養い、実生活における不測の事態が起きた際の対処となり得るものと考えられる。虚構である物語世界と現実との差異はあるが、こうした経験が現実におけるリスク対処を深める機会として接続する可能性は高いだろう。

## 4.2 行動選択や対話の幅を広げる

物語におけるリスク回避行動は、子どもに対して複数の行動選択肢を提供する。項目「2」で述べたように「逃避」「対抗」「依頼」「挑む」といった行動の類型を知ることで、子どもは自身に合った方法でリスク対処しやすくなることが挙げられる。絵本などの物語を通じた学びが活か

されることによって、子どもの行動の柔軟性や選択肢の幅を広げる役割を果たすことにつながる  
と言えよう。また、項目「3.1」で挙げたように、実際に絵本で学んだ物語世界をヒントとする  
ことで、例えば、知らない人への警戒心や情報収集・確認の大切さ、ゲームを通しての危機意識  
の養成、助けを求めるコミュニケーション能力の養成など、子どもにとっての人格形成や社会生  
活において欠かすことの出来ない部分を補完しうる役割を果たすものと考えられる。

また、物語を読んだり、聞いたりするだけでなく、その内容について対話することも重要であ  
る。大人を始め子ども同士で物語の展開について話し合うことで、子どもは自己の感情や考えを  
表現する力をより育てていく。こうした対話が実際の不安やリスクに直面したとき、他者に助け  
を求める行動を選ぶ際にも役立つであろう。

## 5. 教育的意義と課題—小学校では—

### 5.1 物語を通じたリスクマネジメントの学習

子ども向けの物語に登場するリスクとその対処方法を学ぶことを通して、実生活でも応用でき  
る対応方法を学べることは、大きな教育的意義を持つ。物語で学んだ行動パターンを実際に自分  
が困難に直面したときに思い出しやすくするため、物語の内容を繰り返し学ぶことが効果的であ  
る。これは感情をコントロールしつつ、リスクに冷静に対処できる力を育てるための一助となる  
だろう。

### 5.2 物語の選択と学びの内容

小学校1・2学年の国語教科書教材で代表的な作品として、レオ・レオ二作、谷川俊太郎訳の「ス  
イミー」が好例として挙げられる。

「スイミー」は多くの子どもたちに好感をもって受け止められ、大人になってもその好印象の  
変わらない貴重な作品でもある。主人公のスイミーは、それまで一緒に楽しく暮らしていた兄弟  
たちを、「すごい はやさで ミサイルみたいに つっこんで きた」まぐろによって一口で一  
匹残らず飲み込まれてしまう。たった一人だれよりも泳ぎの早いスイミーだけがこの世に残さ  
れる。一瞬間に起きた予想だにできなかった惨劇により、スイミーは地獄の苦しみを味わう。  
「スイミーは およいだ、くらい 海の そこを。」からす貝よりもまっくらなスイミーが光の届  
かない暗い海のそこにいる。暗さは心の闇の色でもある。「こわかった。さびしかった。とても  
かなしかった。」という極限まで削ぎ落とされた3つの言葉で表される生存ぎりぎりの感情。自己  
の生存が脅かされる、人生最大の窮地を子どもたちは授業の中で共有し、もし自分だったらと追  
体験する。戦隊ヒーロー物を見れば直ちに自分がヒーローになりきる姿からもわかる通り、小学  
校1・2年の思考は、感じる力を弱める壁もなければガードもほとんどない。イメージがそのまま  
直截的に体感となり、言葉となる。豊かな指導方法を工夫できる担当教員がどうかにもよるが、  
児童のほぼ全員がその瞬間スイミー自身となって、この苦しみを追体験するということが授業参

観等で実際に見られる光景である。

スイミーが、「だんだん 元気を とりもど」すに従い、学級の児童も元気を取り戻す。スイミーはその後、大きな魚に食べられることを恐れる「スイミーのと そっくりの、小さな 魚の きょうだいたちを」見つける。これまでの経験の中から「いろいろ」と広く考え、「うんと」深く考えることにより、スイミーが目となり、大きな魚として泳ぐことを思いつき、「けっしてはなればなれに ならないこと」と「みんな もちばを まもる」ことでやがて、「大きな 魚を おい出」す。この最終場面も子どもたちは、自らが巨大な魚の真っ黒い目となり、大きな魚を追い出す追体験をする。生存の危機に瀕し、苦しい経験を賢さに変え周囲とともに生き抜いて行くスイミーは、人生を生き抜く知恵を学ぶ場面でもある。

物語の内容や登場キャラクターが、児童のリスク回避行動にどのような影響を与えるかは、物語選択の段階で配慮が求められる。スイミーは、前半の苦しみの深さが後半の喜びの大きさに転化するので、「スイミーのようでありたい」とスイミーに憧れる子どもたちが多く、この作品が長く多くの子どもたちから愛される所以であるとも考えられる。

大学の教職課程において、小学校で扱う教材での研究と授業を行うが、いわゆる定番教材と呼ばれる作品群の中で、「スイミー」は学習当時小学校1～2年生だったのにも関わらず、ストーリーを鮮明に覚えている学生が最も多く、作品の印象もよく、大学で再度教材として扱っても飽きずに嫌がらない貴重な作品となっている。

小学校高学年の作品として「あの坂をのぼれば」という杉みき子の作品がある。「あの坂をのぼれば海が見える」といつも祖母から聞かされていた少年は、朝から海を目指し山道を歩き続ける。「あの坂をのぼれば海が見える」。そう予想するも、峠の頂にたどりつけばその先にまた長い長い山道が続く。帰り道も不安になる。諦めかけ、山道に座り込む。と、生きものの声が聞こえた気がしてふり仰ぐと、頭上に光が走った。それは一羽の白い海鳥だった。ひらひらと舞う白いものをてのひらで受けとめたら、雪のようなひとひらの羽毛だった。羽は、「あの鳥の、おくりものだ」と、そう感じた「少年の心に、大きな翼となって羽ばたいた。」「あの坂をのぼれば、海が見える。」この言葉は、「たとえこのあと三つの坂、四つの坂をこえることになろうとも、必ず海に行き着くことができる、行き着いてみせる」という決意に変わる。この作品においても、何度となく言葉に裏切られ、窮地に追い込まれたからこそ、自然の織りなす出来事をきっかけに、以前より遙かに力強い決意を持って、山道を歩く少年の姿が描き出される。この作品には、思春期の鬱屈した思いと、それを吹き飛ばす爽やかさが充満していることが読み取れる。

小学校低学年で出会う作品と、小学校高学年で扱う作品の二つを挙げることにより、子どもの心の成長に合わせた物語の在り方が見えてくる。物語のリスクの在り方、受け止め方、乗り越え方等を含め、内容が児童の成長に適しているかどうかを検討し、年齢や発達段階に応じた物語を選ぶことが重要である。

## 6. おわりに

本稿では「物語」からの視点を拠り所に、子どもが不安や恐怖などのリスク回避を行う際の行動や心理について、具体的にいくつかの物語を用いながら考察を行った。

子どもの不安やリスク回避における類型的展開として、物語は現実の日常生活で直面しうる不安や危機的な状況が描かれており、それを克服するための様々な行動が登場人物の視点で展開される有効的手段の一つとして挙げられる。子どもは物語世界に触れることで、例えば「逃避」「対抗」「依頼」「挑む」といったリスク回避行動のパターンを疑似体験し、実生活においてもこれらの行動を参考にすることができる。

物語の登場人物が経験する困難やその克服過程では、子どもにとっての情緒的な成長を促し、不安や恐怖に対する耐性を身につけるための基盤となる。また、物語を通じて得た多様な行動選択肢が、実際の生活でも柔軟な対応力を発揮できるような助けとなる。さらに、物語の内容について大人や友人と対話することで、自己表現力や他者とのコミュニケーション力も向上することが想定される。これらは子どもが自己を守り、不安やリスクに対し、冷静に向き合う力を養うための重要なステップとしても期待される。

今後、犯罪の多様化や巧妙化により、物語を教材として活用し、子どもにリスク回避行動のモデルを提供するための教育的取り組みがより求められることも十分考えられる。本稿では論の展開上、防犯目的の絵本を取り上げてはいないが、そこに特化した絵本として既に『危険予測シリーズ どこがあぶないのかな?』<sup>4</sup>『子ども安全えほんシリーズ まもる!防犯絵本』<sup>5</sup>などが刊行されている。ただし、こちらにおいても種類や冊数が充実しているとは言い難い。さらなる拡充を図る一環として、本稿で扱ったような子どもが幼稚園や保育園等で親しんできた絵本や、小学校の国語教科書教材で学習した作品（先述した「スイミー」などの定番教材）をダイレクトに絡めた教材の活用も重要であろう。やはり園や小学校で慣れ親しんだ教材を通して、不安やリスク回避への想像力の養成はより有効性を発揮すると言える。学術領域においては、具体的事例の集積を進め、絵本を始めとした物語における疑似体験（追体験）が現実の防犯意識にどの程度結びつき、啓発誘導としての役割を果たしているのか、アンケートなど数値的な部分も含めたりサーチが今後の課題となるだろう。

子どもにとっての人格形成や社会生活において、適切な物語の選択やその展開についての学びは、現実におけるリスク対処を深める機会を持つと言える。総じて、絵本などの物語における想像力を教育的資源として活用する中で、防犯やリスク管理教育への接続・活用としての新たな可能性も認められるのである。

## 付記

本稿では、1.2.4.6を渡辺賢治が、3を大友由梨香が、5を渡邊洋子が分担して執筆した。

## 注

- (1) 「レファレンス協同データベース」ホームページ参照。<https://crd.ndl.go.jp> (2024年11月28日閲覧)
- (2) 本稿での物語を通じた子どもと防犯に関する疑似体験の他、食育に関する疑似体験もある。詳細については、堤千代子・森恵子・永島倫子・菅淑江「絵本の中の食育」(2008、『中国学園紀要』7) 参照。
- (3) ケンダル・ウォルトン (著)、田村均 (訳) 『フィクションとは何か—ごっこ遊びと芸術—』(2016、名古屋大学出版会)、その他、山岸明子「子どもにとって「想像上の仲間」がもつ発達心理学的意—6つの文学作品をめぐって—」(2017、『順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究』5) 等も挙げられる。
- (4) 池田蔵人・渡辺正樹 (2015～2017)、少年写真新聞社。なお、それぞれ「水べ」「自転車」「野山」「学校」「家」といった種類が刊行されている。
- (5) 瀬辺雅之・国崎信江 (2006)、学習研究社。その他、中村みつを・国崎信江「そなえる」(2006)も学習研究社より刊行されている。

## 参考文献・引用文献

- ・池田彩夏・魚里文彦・板倉昭二 (2019)、「絵本の読み聞かせによる防犯教育の効果の検証」、『発達心理学研究』30 (4)、pp.288-298
- ・伊藤康一郎 (1996)「被害の現実と市民の認識」、『被害者学研究』6、pp.151-161
- ・いもとようこ (2000) 『赤ずきん』、岩崎書店
- ・いもとようこ (2007) 『3びきのこぶた』、金の星社
- ・いもとようこ (2012) 『ジャックとまめのき』、金の星社
- ・いもとようこ (2013) 『ヘンゼルとグレーテル』、金の星社
- ・江尻桂子 (2010)「幼児・児童における危険認知の発達：子どもの安全・防犯教育を考えるためのアプローチ」、『発達心理学研究』21 (4)、pp.332-341
- ・大友由梨香 (2010)、「犯罪不安と対処行動の関係に関する研究—通学に関する意識調査から—」、『常磐研究紀要』4、pp.1-11
- ・加納寛子 (2014)「子どもたちの登下校における不安感と防犯対策の実態」、『計画行政』37 (4)、pp.51-58
- ・Garofalo, J. (1981) . The fear of crime: Causes and consequences. *Journal of Criminal Law and Criminology*, 72, p.840.
- ・川端有子 (2013)「児童文学の教科書」、玉川大学出版部
- ・警察庁、「「おやこでまなぼう！「いかのおすし」で毎日安全！」」(2022.6.22)  
<https://www.keishicho.metro.tokyo.lg.jp/kurashi/higai/kodomo/kodomo110.html> (2024年11月

24日閲覧)

- ・ C.S.ルイス (著)、瀬田貞二 (訳) (1966)、『ライオンと魔女 ナルニア国ものがたり 1』、岩波書店
- ・ 公益財団法人 日工組社会安全研究財団、「犯罪に対する不安感等に関する調査研究—第6回調査報告書—」(2019) <https://www.syaanken.or.jp/?p=10773> (2024年11月27日閲覧)
- ・ 杉みき子「あの坂をのぼれば」、『ひろがる言葉 小学国語』(2024)、教育出版
- ・ 寺村輝夫 (著)、永井郁子 (イラスト)『ヘンゼルとグレーテル』(2007)、小学館
- ・ Ferraro,K.F. (1995) . Fear of Crime Interpreting Victimization Risk, State University of New York Press,New York. p8.
- ・ 藤井義久 (2010)「小学生の犯罪不安と防犯意識に関する発達の研究」、『発達心理学研究』21(4)、pp.375-385
- ・ 法務省 (2023)、「令和5年版 犯罪白書 —非行少年と生育環境—」  
<https://hakusyol.moj.go.jp/jp/70/nfm/gmokuji.html> (2024年11月28日閲覧)
- ・ ヤーコブ・グリム・ヴィルヘルム・グリム (著)、矢崎源九郎 (訳) (1980)「グリム童話集 (1)」、偕成社
- ・ ライマン・フランク・ポーム (著)、宮坂宏美 (訳) (2011)、『オズの魔法使いシリーズ 完訳 オズの魔法使い』、復刊ドットコム
- ・ レオ・レオニ「スイミー」、『こくご 2上』(2024)、光村図書
- ・ 「レファレンス協同データベース」<https://crd.ndl.go.jp> (2024年11月28日閲覧)